

関連調査（動物調査）の調査結果

・渡良瀬遊水地 猛禽類調査報告

渡良瀬遊水地

猛禽類調査報告

渡良瀬遊水地野鳥観察会（遊鳥会）

1、経過

平成 22 年 1 月に、渡良瀬遊水地の身近に住まう初心者を中心に結成した「渡良瀬遊水地野鳥観察会（遊鳥会）」は、基礎的な知識を得るため、2 月から 9 月までに 8 回の観察会を重ね、渡良瀬遊水地の地理、地形、植生を学び、野鳥の識別や習性の理解などの能力を高めてまいりました。

そして越冬猛禽の渡来が本格化する 10 月から 3 月までの 6 回、湿地再生工事が進行中の第 2 調節地を中心に、湿地再生に資するため、猛禽類の、第 2 調節地の利用状況調査を実施しました。

3 月 11 日に東日本大震災があり、そのことによりヨシ焼きが中止になりました。ヨシ焼き中止がどのようにチュウヒの繁殖に繋がるのかを、第 2 調節地の猛禽類利用状況調査に引き継いで行なうことにし、4 月 16 日に渡良瀬遊水地全域で、チュウヒの生息状況調査を実施しました。それを基礎資料として 20 回の補足調査と 2 回の踏査を行ないました。

2、調査方法

10 月から翌年 3 月までの、月 1 回の第 2 調節地における猛禽類調査 6 回と、渡良瀬遊水地全域を対象とした 4 月のチュウヒの繁殖基礎調査は、9 時～12 時（3 時間）の定点観察で、その後の補充調査は定点観察とラインセンサス法を適時に併用し、車での移動を多用して行ないました。

3、結果

出現種数及び出現回数

種名	10 月 7 日	11 月 21 日	12 月 9 日	1 月 15 日	2 月 24 日	3 月 19 日	計
ミサゴ	1	2					3
トビ	1	2	4	5	3	3	18
オオタカ		1					1
ノスリ	2	4	8	14	16	15	59
ハイイロチュウヒ		5		1	2	1	9
チュウヒ	4	3	6	3	4	8	28
チョウゲンボウ	1	2	1				4
計	9	19	19	23	25	27	122

資料 1（1 月 15 日の第 2 調節地における猛禽類飛翔軌跡）

資料 2-1（第 1 調節地のチュウヒ繁殖基礎調査の飛翔軌跡）

資料 2-2（第 3 調節地のチュウヒ繁殖基礎調査の飛翔軌跡）

資料 3（第 1 調節地のチュウヒ繁殖補足調査の飛翔軌跡）

4、考察及び提言

(1) 第 2 調節猛禽類の利用状況調査

6回の調査で、ワシタカ科6種、ハヤブサ科1種の出現がありました。合計で7種、122回の出現で、毎回出現していたのはトビ、ノスリ、チュウヒの3種でした。

ミサゴは3回の出現、出現率は約2.5パーセントで、12月以降は調査時間内に観察できた個体はありませんでした。渡来時期の初期には数多く観察され、その後に数が減っていく傾向がありますが、移動の途中で渡良瀬遊水池を一時の休憩地として利用している個体がある、ということだと思います。若い越冬個体が観察されることもあります。海の近くで繁殖することが多いが、内陸の湖沼に面した斜面で繁殖している例もありますので動向には注意が必要です。

ミサゴは狩で捕えた獲物を、毎回同じ木で喰うことが多いので、湿地再生を考える上で、大きな樹木を含む樹林や、丈の高い独立した樹木を用意すると良いと思います。狩場は谷中湖をはじめ、随所にある池沼、水路を利用しているほか、遠距離を移動して狩をしていますので、狩場に対する配慮の必要はないと思います。

トビは18回の出現、出現率は約14.8パーセントと少なめでしたが、渡良瀬遊水池全体では増加傾向にあります。谷中湖の冬期の干し上げが関係しているのかもしれませんが。

トビの渡良瀬遊水池内での繁殖は、2001年に古河ゴルフリンクスの北西端の大きなヤナギに営巣して以降、営巣林を変えながら、断続的に続いています。今期は第3調節地の、オオタカの営巣林の南西の林縁近くに営巣、2羽の雛を巣立たせています。なお、この林ではトラフズクの繁殖も確認されています。

湿地再生に際して特段の配慮は必要ないと思います。

オオタカの出現は成鳥が1回のみで、出現率は約0.8パーセントでしたが、樹林内に潜んでいるものを見落としているのかもしれませんが。ここで越冬するオオタカは、繁殖個体と、山地や北方からの移動個体があると思います。

渡良瀬遊水池では1997年に初めて、第3調節地で繁殖が確認され、その後も順調に繁殖を続けています。待ち伏せ型の狩をする他、空中でハトを追ったり、地上を駆け歩いて餌動物を探したりと、状況に合わせた多様な狩をします。湿地再生に際しては、樹林に面した開けた草地、湿地、池沼などを用意すればよいと思います。

ノスリは59回の出現で約48パーセントを占め、渡良瀬遊水池の越冬猛禽の中で最も優先度の高い種であることが分かりました。林縁や堤防上のポール、櫓などを利用して狩の待ち伏せや休憩に利用し、適時に樹林間を移動し、樹林内に入ることもありました。調査時間内に狩は観察出来ませんでしたが、出現率2位のチュウヒとの競合はないようでした。

渡来時期は他の越冬猛禽より遅いようです。山地で繁殖するが、競合するオオタカの巣を乗っ取るなどして、繁殖域を拡大させています。渡良瀬遊水池でも増加傾向にあり、今後の動向に注目していきたい種です。

ノスリは高みに待機し、裸地や丈の低い草地に出現する獲物を捕える狩を多くするので、湿地再生を図る上では樹林、樹木と組み合わせた裸地、草地の創出が必要だと思います。

雌雄のディスプレイフライトが見られました。今期の最終確認は6月16日でしたが、

ケアシノスリが5月下旬から6月下旬まで姿を見せていました。

ハイロチュウヒは9回の出現で、出現率は約3.4パーセントでした。

ハイロチュウヒは増加傾向にありますが、ハタネズミなど餌動物が大量に発生した年の渡来数が多いようで、今期はそれに当たっていました。これはノスリ、コミミズクも同傾向にありますが、チュウヒについてはその傾向が顕著ではなく、はっきりわかっていません。

習性はチュウヒに似ると言われていますが、より早く低空を飛び、狩りは堤防の斜面を多用してハタネズミなどを狩るほか、ヨシ原に潜む小鳥群を追い出して追っています。湿地再生に際しては、狩の多くは堤防を利用、または遊水地外に出て行き、ねぐらはチュウヒのねぐらに準じるので、特段の配慮は必要ないと思います。

チュウヒはノスリに次いで28回の出現で、出現率は約23パーセントでした。樹林を避けてゆっくり飛翔し、時折反転するようにしてヨシ原に下りました。狩りに成功した場合、捕らえた餌動物がハタネズミクラスであるなら、食事に約20分要するので、それを目安に狩か休憩かの判断をするように考えたのですが、そこまでの特定は出来ませんでした。

過去の観察では、飛翔中に獲物を見つけ、降下して直接獲物を捕える他、降下地点で待機したり、枯れ草の下から獲物を追い出して捕らえるなど、狩の詳細は多様でしたが、ヨシが密生した場所での狩は苦手なようです。

チュウヒは2003年前後から減少傾向にあります。人によるヨシの利用（ヨシの刈取り）がチュウヒの狩場の創出となっていたものが、ヨシ利用の衰退がチュウヒの狩場の喪失となり、その結果チュウヒの渡来数の減少に繋がったのかもしれませんが。ねぐら入りするチュウヒの数に大きな変化なし、とする見方があります。あるいは狩場の消失により、昼間の狩は遊水地の外であるようになっていいるのかも知れません。湿地再生に際しては、スゲ混じりの疎らなヨシ原や草地と、水路、池沼、湿地を組み合わせ、チュウヒの狩場を創出することが重要だと思います。水辺に帯状に続く裸地は、姿を見せる小動物を見通せる効率的な狩場になると思います。利根川下流域の繁殖地では、河川、河川敷、休耕田の多い田圃が組み合わさっていて、河岸には広くはないヨシ原が断続的に続いていて、環境の多様さを感じました。既存の田畑を組み合わせても良いと思います。過去においては、渡良瀬遊水地でチュウヒが繁殖していたと言う痕跡はありません。しかし、海辺に近い湿地で繁殖すると言われていたオオセッカが、渡良瀬遊水地で繁殖を始めています。チュウヒの雌雄のディスプレイフライトが見られました。オオセッカと同じような環境で繁殖するチュウヒです。後述する繁殖調査ではチュウヒの繁殖は確認されませんでした。後日、チュウヒ繁殖の知らせを確認者から頂きました。今後の課題は繁殖を安定的に継続させることで、そのためには繁殖環境の保全とともに、狩場の創出などの工夫によって、チュウヒの生息密度を高めることが必要だと思います。

チョウゲンボウは4回の出現で、出現率は約3.3パーセントでした。

毎期、第1水門で繁殖しています。今期はハシブトガラスの繁殖妨害に遭い、2羽のみが巣立ちしました。従来は、第2水門、野渡橋の橋げたで繁殖していましたが、第2水門のものはハシブトガラス、野渡のものはカメラマンによる繁殖妨害に遭い、現在は

繁殖をやめています。土手の斜面上空でホバリングして、ハタネズミなどを狩っています。湿地再生にさいして特別な配慮は必要ないと思います。

なお、調査の時間外であります。4月16日に第3調節地の巴波川側にサシバが確認されています。渡良瀬遊水地での繁殖は、最盛の頃は4～5巣ありましたが段々に減少し、今期は繁殖していません。第2調節地では与良川沿いの樹林に営巣し、堤防の斜面で時季に応じて、爬虫類、両生類、昆虫を狩って、巣に運んでいました。渡良瀬遊水地でのサシバ繁殖の衰退は、ヨシ焼きによって樹林がやせ細ってしまったことによる営巣林の喪失と、餌動物の減少や採餌環境の変化が原因のように思われます。従って湿地再生に当たっては、樹林帯の保護と再生、樹林に面した餌動物が生息できる湿地、池沼の創出が必要です。サシバは全国的に減少しています。

(2) ヨシ焼き中止によるチュウヒの繁殖調査

4月16日の基礎調査は遊水地全域で行ないました。第1調節地では4個体が出現し、そのうちの3個体は同時出現でした。そのうちの1羽は高度を上げた後、急降下し、ヨシのなかに降下しましたが、これはディスプレイフライトと考えて良いと思います。第2調節地ではチュウヒの出現はありませんでした。第3調節地では1羽が出現し、飛翔と降下を繰り返していました。狩をしていたものと思いますが最終的にはヨシが刈られた所に降下し、その後の飛立ちは見られませんでした。狩に成功したのかもしれませんが。

以上のことから4月の段階では数羽のチュウヒが残留していることが分かりました。

20回の補足調査は基礎調査は1番出現数の多かった第1調節地を中心に行ないました。補足調査中の出現回数は7回で、全て単独での出現でした。5月5日のものは右主翼次列風切が欠損のオス、6月3日のものは右初列風切が欠損のオス、6月5日のものは両次列風切欠損のオス、6月19日のものは両次列風切欠損のメスでした。あとの3個体は識別できませんでしたが、このことは5月5日から6月5日の間に、少なくとも4個体が生息していたことを表すと同時に、常に個体が入れ替わっていて、移動中の個体である可能性を示しています。

繁殖には巣を構える必用から特定の雌雄が特定のエリアに出現することになりますが、そのようなことは観察されませんでした。4月24日と5月5日の出現場所及び6月5日に出現して降下した場所が重なり、6月13日の降下場所及び6月16日の飛翔コースが重なる2箇所を踏査しましたが、繁殖している気配は無く、6月下旬～7月中旬に、随時、チュウヒの巣立ち雛を探して歩きましたが、見つかりませんでした。なお、8月1日に、第1調節地で、羽根に欠損の無い成鳥のメスと思われる個体が観察されています。

チュウヒの繁殖が確認され、時系列に写された写真を確認者から頂きましたので、後日、繁殖個体と、本調査の出現個体との照合をしたいと思っています。

チュウヒの繁殖地では越冬期の生息密度が高く、繁殖期初期には幾組もの雌雄によるディスプレイフライトが見られ、そのうちの僅かなつがいが残留して営巣し、その他多数は他の繁殖地に移動してしまうようです。

渡良瀬遊水地では越冬期のチュウヒの生息密度は、越冬個体を30羽として、1ヘクタール当たり約0.01羽、100ヘクタールで1羽と決して高くはありません。チュウヒの繁

殖を安定的に継続させるためには、狩場の創出などの工夫を通して、チュウヒの生息密度を高めていく努力が必要だと思います。

なお、初確認されたチュウヒの繁殖地に隣接して田畑があることにも、注目しておきたいと思います。

追記

チュウヒの繁殖について、確認をなされた川越市在住の市川氏から、経過を含めた資料を頂きました。雛は結局巣立ち出来ず、その主たる原因は、カメラマンによる繁殖妨害にあったように思われます。来期はその原因等を考えた上での対策が必要だと思い、次のように提言します。

- ① 繁殖地の保全
- ② 繁殖調査の実施
- ③ 立ち入り禁止区域の設定
- ④ 監視体制の確立
- ⑤ 渡良瀬遊水地をフィールドにする各自然保護団体は、所属会員に対し、繁殖妨害になるような写真撮影を自粛するよう、指導を強化する。

以上

参考



チュウヒのねぐら (メス?)



チュウヒ (オス)



チュウヒ (メス)



チュウヒ (幼鳥)



チュウヒ (メス?)

資料1
平成23年1月15日(土)
第2調節池における
猛禽類飛翔軌跡調査

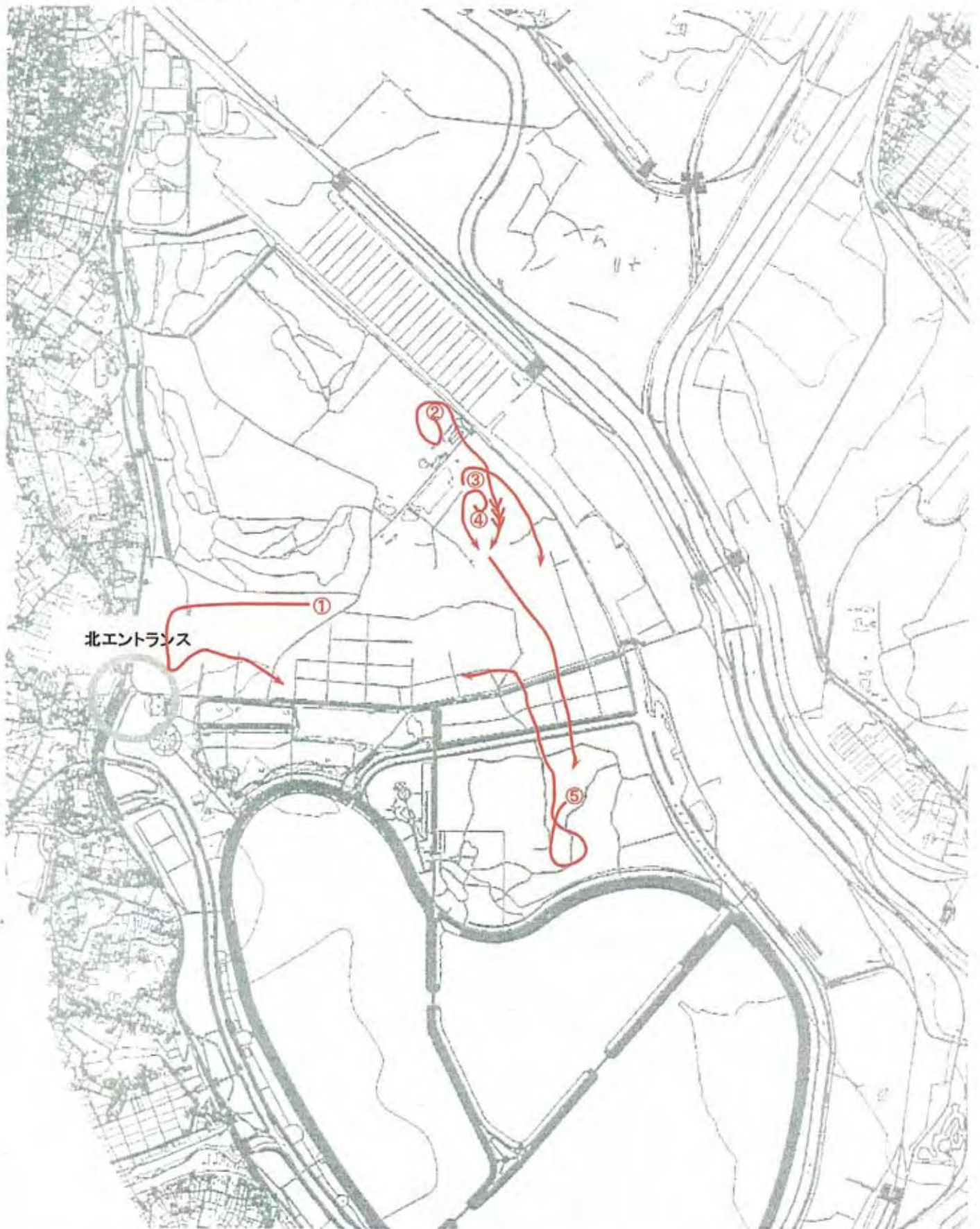
9:20~11:30 晴れ(薄曇り)
南西の風 気温 0℃

No.	種名	備考
1	ノスリ	
2	トビ	2羽
3	ノスリ	同時2羽
4	ノスリ	
5	ノスリ	
6	ノスリ	
7	チュウヒ	
8	トビ	
9	ノスリ	
10	ハイイロチュウヒ	
11	ノスリ	
12	チュウヒ	
13	ノスリ	
14	ノスリ	
15	ノスリ	
16	トビ	3羽
17	ノスリ	
18	チュウヒ	
19	ノスリ	
20	ノスリ	
21	トビ	
22	チュウヒ	
23	ノスリ	



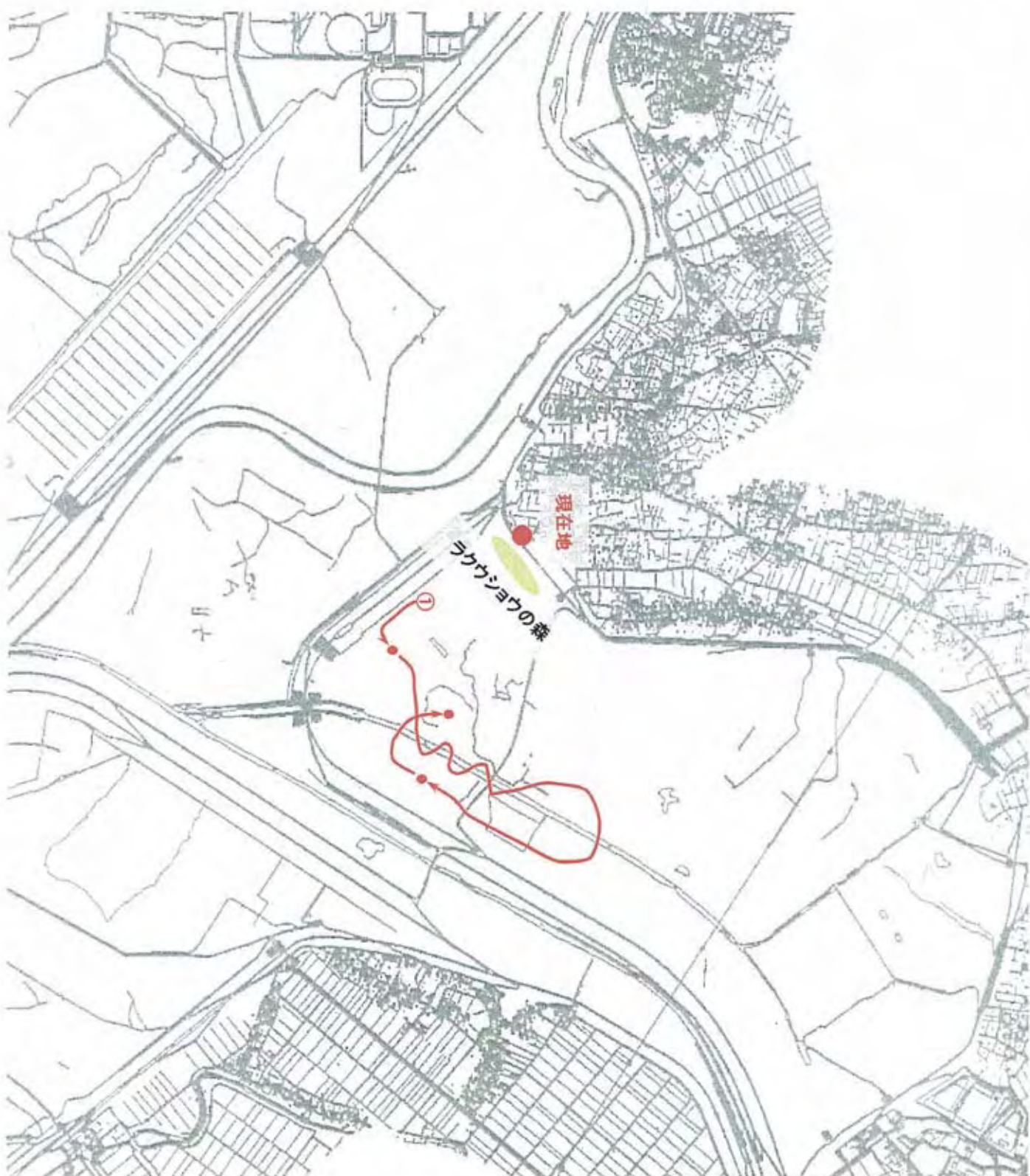
資料2-1

平成23年4月16日(土) チュウヒ繁殖基礎調査(第1調節池)

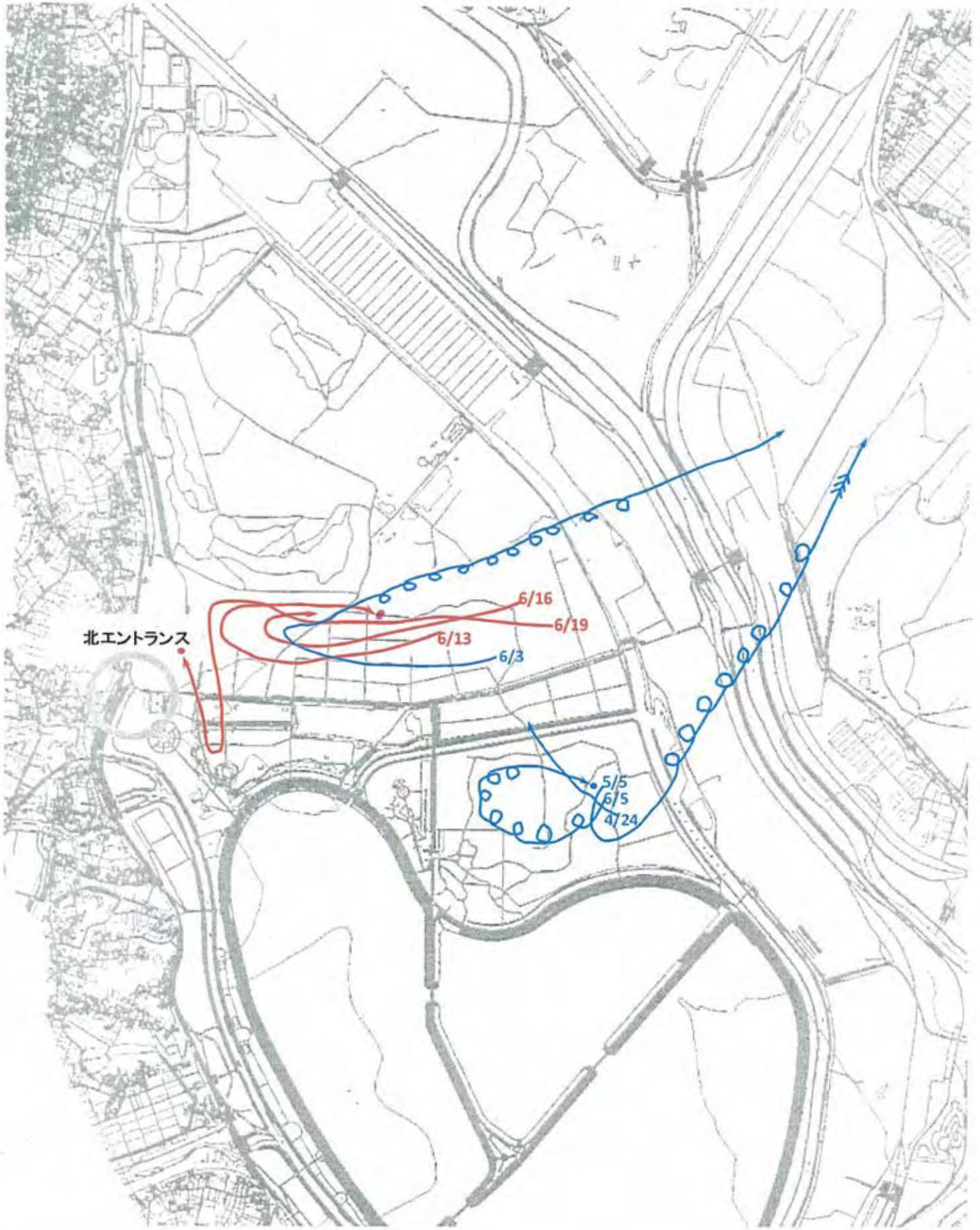


メモ: 飛行軌跡 止まり 急降下

②、③、④は同時に出現、②ディスプレイフライト(急降下)



資料3
チュウヒ繁殖補足調査(第1調節池)



メモ: ← オス ← メス

5/5オス、ディスプレイフライト(波状飛行、急降下)